ジャクソンのシネマハウスで会いましょう！

前橋市国際交流員　ジャクソン・バニスターの活動報告　　令和８年２月

前橋市のミニシアター「前橋シネマハウス」。映画好きの国際交流員ジャクソンが、支配人おすすめの一本を観て、レビューをお届けします。映画は国境を超える！
皆さん、映画館でお会いましょう!

２月の映画

『ペンギン・レッスン』

２０２４年　イギリス

Jackson Bannister

群馬県前橋市の国際交流員(CIR)として、日本人と外国人との文化的理解を深めるために活動しています。

映画はもう一人の家族

～前橋の街で新たな映画の発見を。地域とつながりを持った映画館を目指します～

映画を通じて家族のようなつながりを地域の皆さんと作っていきたいという思いから“前橋シネマハウス”をオープンすることになりました。小さな映画館ではありますが、前橋の街なかから様々な映画を発信しています。上映が少ないミニシアター系の良作からシネコンで上映が終了したヒット作、お子様と一緒にファミリーで楽しめる作品、過去の名画など様々なジャンルから作品をセレクトし新しい映画を発見してもらえる。そんな“シネマハウス”をつくっていきたいと思います。

前橋シネマハウス
MAEBASHI CINEMA HOUSE

MISSION ―――――― 前橋千代田町五丁目1－16前橋プラザ元気21別館3階

前橋市役所文化国際課
ジャクソン・バニスター
第２号　令和８年２月

ペンギン
レッスン

皮肉とユーモアに包まれた、静かな反ファシズムの物語。

正直に言えば、『ペンギン・レッスン』にはそれほど大きな期待を抱かずに鑑賞した。ポスターの印象から、動物と人間の交流を描く軽めのファミリー向け作品であろうと想像していたからである。しかし実際には、予想以上に大人向けで、主題意識が明確かつ感情に訴える力を持った作品であった。動物が登場する映画を子ども向けと結びつけがちであるが、本作はその先入観を早々に覆す。

物語の中心にいるのは**スティーブ・クーガン**であり、本作においても安定した演技を披露している。本作はきわめて“イギリス的”な作品であり、陰鬱で皮肉の効いたドライなユーモアが全体を貫いているが、クーガンはその空気感を見事に体現している。とりわけ印象的なのは、主人公の微細な成長を繊細に表現している点である。物語の進行とともに確かな変化が見て取れるが、キャラクターの本質的な性格を崩すことなく演じ切っている。その成長は誇張されたものではなく、あくまで自然で説得力のある描写である。

脇を固める俳優陣も堅実な演技を見せている。突出して目立つ者はいないが、それは本作においてむしろ妥当である。本作は明確に主人公中心の構造を持つため、脇役が過度に存在感を示せば物語の焦点が散漫になりかねない。その中で、フィンランド人「タピオ」を演じた**ビョルン・グスタフソン**は、やや風変わりで印象に残る存在であった。良い意味でヨーロッパ映画ならではの人物像である。

また、アルゼンチン人俳優たちの演技も高く評価できる。アルゼンチン映画での出演歴がそれほど多くないものの、英語の台詞を自然にこなし、豊富なキャリアを持つクーガンと十分に渡り合っている。物語に現実感と厚みを与えている。

主題面において、本作は反ファシズムのメッセージを的確に提示しているが、決して説教的ではない。脚本は本作の最大の強みである。機知に富み、思索を促す内容でありながら、声高に主張することなくファシズムを批判している点は評価に値する。ただし、いくつかの物語の展開については掘り下げが不足している印象も否めない。特に生徒たちに関してはやや描写が浅いと感じられた。上映時間は111分と十分な長さではあるが、あと15～20分程度の余裕があれば各物語線をより丁寧に描写できたか、あるいは序盤のやや冗長な場面を整理することで全体の完成度を高められた可能性がある。

技術面では、カメラワークが特に印象的である。中盤には構図やカメラの動きに工夫を凝らした場面が多く、視覚的にも興味深い。優れた脚本と俳優陣の演技が相まって、本作は当初の印象以上に完成度の高い作品となっている。

そして、題名にもあるペンギンの存在である。非常に愛らしく、効果的なコメディ要素として機能している。同種の作品では動物とのやり取りに依存しすぎる傾向が見られるが、そのバランスを巧みに保っている。

登場の頻度も適切で、過度な演出によって観客を疲れさせることはない。とはいえ、『ペンギン・レッスン』という題名から想像されるほど、“ペンギンそのもの”を主題とした作品ではない。むしろ、ペンギンは物語を動かす契機として機能している存在である。

総じて、『グッド・ウィル・ハンティング』や**『いまを生きる』**のような似ている名作と肩を並べる作品ではないが、本作は自らの目標を着実に達成している。心温まる物語であり、現代にも通じる政治的主題を内包する作品である。鑑賞後、当初の予想以上に強い印象を受けた。

権威主義やファシズムの問題が再び現実味を帯びる現代において、この種の批評性を持つ作品は重要である。イギリス的ユーモアを好む者、歴史的背景を持つ作品に関心のある者、あるいは思索を促す良質な娯楽作品を求める者にとって、本作は十分に鑑賞に値する作品である。